
西瓜

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西瓜

【Nコード】

N1695L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

防衛省が手を焼く厄介者の天災科学者東山博士。よりによって生物兵器の開発までやらかしたがその兵器とは何か。SFコメディです。

第一章

西瓜

防衛省、ひいては自衛隊への批判は多い。

そのいざという時に全く動けない法整備だけでなく兵器の非常識な値段を筆頭とした予算の使い方についてもだ。要するに防衛政策がなっていないのである。

そのことは知っている者から常に批判されているが一向にあらたまる気配がない。それは政策を決定し行う政治家に軍事知識がある人材が極めて少ないことと予算をチェックする財務省が軍事に政治家と同じだけ疎く防衛省も何も言えず企業も採算だけを考えているからである。ある意味において軍国主義よりもまずい状況なのであるがそれでもあらたまる気配が一切ない深刻な状況が続いてしまっている。

その兵器等への予算の使い方が自衛隊は技術開発においても非常に無駄なコストを使ってしまうている。その一つとしてこの博士への研究費の投資がある。

東山純。国立大学を主席で卒業し海外への留学経験を持っている。理学だけでなく工学や医学、薬物学等の博士号を持つ天才である。まだ三十代であるが世界的に名前を知られている。小さい目に広い額を持っている。背は一八〇を超えており長身でも目立っている。その彼の研究への投資が最近防衛省の中でも問題になっていた。何故かというのだ。

「今度は何をするんだろうな」

「何をしてかすのか」

博士のその行動についての言葉だ。

「目を離すと何するかわからん人だからな」

「見てもするしな」

「全くだ」

「あれじゃあ大槻教授と変わらないな」

「遥かに酷いんじゃないのか？」

おおよそ科学者とは思えない超絶的な主張をする人物よりも酷いと言われている。確かにこの教授も好人物であるがその主張がおかしな部分が多いのも事実であろう。

「あの人よりも。何しろあの人はないな」

「ああ、あの教授は」

「少なくとも他の人に迷惑はかけないからな」

そうした意味で良心的な人物ではあるのだ。

「けれどあの博士はなあ」

「そうだよな。つねに迷惑をかけるからな」

「しかもコスト無視するしな」

「完全にな」

ただでさえ問題のあるその防衛省のコストのことをである。

「援助とかカットするか？」

「そうだな。けれどな」

「けれど？」

「カットしたらカットしたであの人資金を勝手に調達しかねないぞ」

こうした危険も予想される人物なのだ。

「裏社会ならまだいいが」

「それでいいのか」

「それだけじゃない」

そうだというのである。

「錬金術とか本当にやりかねないぞ」

「洒落にならないな、それは」

防衛省の面々らしからぬいささかオカルティックな話にもなっていた。

「それでまた何か起こったら」

「ことだぞ。だからな」

「野放しにしない為にもか」

「ああ、投資は続けよう」

「どうにもならないな」

こう話をするのであった。彼等も頭を抱えていた。その博士の研究所は鎌倉にある。海が見える断崖はかつては自殺の名所であった。浮かばれぬ亡霊達の呻き声が聞こえてきそうなその断崖の上に不気味な古城が立っている。吸血鬼が棲んでいてもおかしくはない。

その城に博士はいる。より付く者はいない。何やら不気味な雰囲気漂わせたその西洋風の城の中に博士はいた。何とこの城が研究所なのだ。

その彼がだ。今何かを考えていた。城の自分の部屋から海を見ながら言うのであった。

「決めた」

「決めたって何をですか？」

助手に雇われている若い青年が彼に問うた。大学を卒業したばかりと思われる精悍な顔をしている。しかしその顔が今は曇っている。

「今度は何をするんですか？」

「若宮君」

その青年若宮健次に顔を向けて問う博士だった。

「君は西瓜は好きか」

「好きですけど」

その問いには素直に答える健次だった。

「それが何か」

「そうか、わかった」

それを聞いて静かに頷く博士であった。

「それではだ」

「それでは？」

「これから研究をする」

こう言ってきたのである。

第二章

「西瓜を使ってだ」

「西瓜をですか」

「丁度防衛省からもまた依頼が来ておるな」

「来てませんよ」

素直に答える健次だった。部屋の中は絨毯が敷かれ昼だというのにいささか暗い。健次はその部屋の真ん中のところに立って博士に對しているのである。

「それは」

「なら押し付けるまでよ」

こう言う博士であった。

「私の研究をな」

「またですか」

「私は天才だ」

急にこんなことも言い出してきた。

「その私が研究、開発したものをまた防衛省にくれてやるのだ。有り難いことだ」

「防衛省も困ってるみたいですな」

「私の才能の前にな」

博士はポジティブシンキングであった。それもかなりのの。

「困惑しているのだな」

「確かに困惑していますね」

「ならばもっと困惑させてやろう」

満面に笑みを浮かべての言葉である。何故か非常に邪悪な笑みに見える。

「これからだ」

「これから？」

「あっと驚く兵器を作ってみせる」

こうも言うのであった。

「それでだ」

「それで？」

「西瓜だが」

話がそこに戻った。いきなりである。

「よいか、それは」

「何かわからないですけれど西瓜を食べたいんですか？」

「まあ食べるんなら切りますよ」

健次は何となく博士に返した。

「デザートに」

「そうじゃな。今日のデザートはそれじゃな」

「じゃあそういうことで」

「よし、それではじゃ」

博士はその邪悪にしか見えない笑みでさらに言ってきた。

「その西瓜を使ってじゃ」

「何かデザートでも作るんですか？博士料理は」

「兵器を作る」

そうするというのである。

「兵器をじゃ。よいな」

「西瓜で兵器を？」

「世の中には生物兵器というものがある」

いきなり非人道的な話をしてきた。

「それは知っておるな」

「自衛隊そういう兵器はお断りですけど」

健次は醒めた目で博士に告げた。

「化学兵器も細菌兵器も核兵器も」

「けしからんことじゃ」

「というか自衛隊には必要ないんじゃ」

「そんなことだからあそこまでの質を持ちながら二流なのじゃ」
自衛隊の兵器をこう言って酷評するのだった。

「全くもってけしからん」

「左様じゃ。それでじゃ」

「それで？」

「そんなことは無視する」

実に強引極まる言葉である。

「防衛省の腑抜け共の甘い考えはな」

「政治家も企業もですけれど」

「ではどちらも無視してやる」

「無視したら誰も受けてくれませんよ」

「そのまま強引に押し付けるまでだ」

何処までも自己中心的な人物である。ある意味一途である。

「全くじゃ」

「全くですか」

「そうじゃ。けしからん」

こう言つてである。さらに言う言葉はだ。

「それでじゃ。そんな下らぬ戯言は一切無視してじゃ」

「どうするんですか？ 本当に」

「西瓜の兵器を作る」

そうするというのである。

第三章

「西瓜を使ったバイオ兵器をじゃ」

「西瓜を、ですか」

「何かおかしいか？」

「何をどうやったらそんな発想になるんですか？」

健次はそこまで聞いて思わず眉を顰めさせた。

「西瓜をつて」

「何度も言うが私は天才だ」

このこともまた言うのであった。

「その天才の私に不可能はない」

「それで西瓜なんですか」

「わかったな。それではじゃ」

「西瓜の兵器ですか」

「では今からスーパーに行く」

話はいきなり所帯じみてきた。非人道的な話から庶民的な話に急展開である。

「いいな」

「それで西瓜を買ってですね」

「今城にある西瓜はデザートにする」

それはそうするというのである。

「それではじゃ。よいな」

「まずは西瓜を買ってですね」

「そうする」

こう言うてである。こうして博士の恐ろしい研究がはじまるのであった。

博士は夕食の西瓜を食べるとである。すぐに研究室に入った。得体の知れない生物が入っているフラスコに不気味な機械、あちこちに飛び散る火花、それは科学というよりも錬金術の場である。彼は

その中にいて健次に対して悠然とした笑みを浮かべているのであった。

その笑みが火花に照らされ赤や青に輝き一層不気味さを醸し出している。火花がスパークする音がBGMになっていた。そんな中であった。

その博士がだ。言ってきた。

「では今からじゃ」

「西瓜の兵器をですか」

「そうじゃ。作る」

改造用のベッドの上のでかい西瓜を撫でながら語る。

「これからな」

「本当に西瓜からですか？」

健次はここでも怪訝な顔で博士に問う。

「兵器をつて」

「何か信じられんようじゃな」

「西瓜は食べ物ですよ」

これは健次だけでなくほぼ全ての者が思うことである。

「それを兵器につて」

「見ておるのじゃ。またしても私の天才ぶりがこの世に知れ渡ることになる」

「天災じゃなくですか」

「そうじゃ。天才だ」

字が違っていた。

「それがまたわかる」

「まあそう仰るならいいですけど」

健次はもう博士には多くは突っ込まなかった。呆れているからである。

「それじゃあ僕はいつもの様にですね」

「手伝いを頼むぞ」

「わかりました」

こういささか無気力に応える。そうしてそのうえで博士のその悪魔の研究を手伝うのである。そうして暫くして。陸上自衛隊のある部隊にこう通達が来た。

「何、西瓜畑に行け？」

「武装して？」

陸自の面々はそれを聞いてまずは眉を顰めさせた。

「何で西瓜畑に武装してなんだ？」

「西瓜を食えってのか？」

「だったら武装しないだろう？」

彼等は話が全くわからず首を捻るばかりであった。

「それならな」

「そうだよな。じゃあ何でなんだ？」

「とにかく命令ではそうだな」

自衛隊も軍である。軍で命令は絶対である。それならばもう答えは出ていた。

「それならな」

「そうだな。行くしかないか」

「武装してな」

こうして彼等はヘルメットに小銃、それに陸戦服でその指定された西瓜畑に向かった。見れば何の変哲もない本当にただの西瓜畑である。彼等はその見事な大きさの西瓜達を見てここでも首を傾げさせた。

第四章

「西瓜だよな」

「ああ、どう見てもな」

「ただのな」

そうとしか見えなかったし思えなかった。

「何でそれで武装してなんだ？」

「冗談でもないみたいだしな」

「これが訓練なのか？」

こんなことを言い合いながら西瓜畑に近付いていく。そうして先頭の一人がその畑の中に足を踏み入れるとであった。その瞬間に。

西瓜達が一斉に飛び上がってきた。そうしてである。

その丸いところに手足が出て来て目と口まで出て来た。口は三日月形で見事に裂けていて目は笑ったようになっていた。そこから西瓜の赤い中身と種が見えている。

その西瓜達だ。自衛官達に襲い掛かってきたのだ。

「な、何なんだこれは！」

「西瓜だよな！」

「ああ、西瓜だ！」

「それは間違いない！」

どう見てもであった。しかしである。

その西瓜達から手足が生えてそのうえ目と口が出て来たのだ。そのうえで彼等に対して襲い掛かって来たのである。

音もなく飛び掛って来る。そうして。

体当たりを仕掛けて来た。自衛官達に向かってである。

「痛っ！」

「西瓜が体当たりを仕掛けて来たぞ！」

「しかもこいつ等！」

「素早いぞ！」

猛スピードで向かって来てそれで西瓜がぶつかるのだ。これは痛かった。

ヘルメットで頭を守っているのです。そこは安全だった。しかし身体にぶつかるのかなりのダメージである。しかも服もそれでべとべとになる。

西瓜の液がかなりまとわりつく。皆そのことに困っていた。

「西瓜って痛いんだな」

「そうだな」

しかもである。それだけではなかった。

西瓜達はその口から種を飛ばしてきた。まるでマシンガンの如く。それもまた痛かった。種も猛スピードで数がぶつかるのかなり痛い。

さらに。

彼等の足元に来ると爆発する。それに巻き込まれましても痛い目を見る自衛官達だった。

「何でこんな目に遭うんだ？」

「西瓜に」

彼等は皆啞然としながら言う。

「まさかと思うけれどこれってな」

「だよな、あの博士だよな」

「絶対にな」

皆そのことを察しだした。これまでの訳のわからない攻撃を受けてた。

それで反撃に出ようとする。しかしである。

西瓜達は次から次に出て来る。そのうえで自衛官達を攻撃してくる。その攻撃を受けて遂に、であった。

「撤退だ！」

「は、はい！」

「何かわからないが！」

「今はとりあえず！」

こう言って撤退する彼等だった。彼等にとってみれば全くもって訳のわからない話だった。

しかしである。博士はその話を聞いてた。その不気味な古城の中で笑うのであった。

「成功だな」

「自衛隊の人達にとっては酷い話ですけどね」

「だがそれがいい」

「いいんですか」

「人の迷惑になる」

ここでそのことについて言った。

「それは兵器としてはいいことだ」

「だからいいんですか」

「左様、それではだ」

博士はまた窓を見ながら健次に話している。窓の外では暗鬱な空が広がっている。海も鉛色になってしまっており暗い世界があった。その暗い世界を見ながらだ。博士は言うのであった。

「これからはだ」

「これからは？」

「あの西瓜を防衛省に売りつける」

「防衛省は即刻研究を中止しろと言っています」

「何っ!？」

博士は健次のその言葉を聞いて不機嫌そのものの顔で応えた。顔を彼に向けている。

第五章

「それは本当のことか」

「ですから自衛隊はそういう兵器は扱っていませんよ」

「では押し売りするだけだ」

「それでも受け取らないそうです」

流石に防衛省としてはそんなとんでもないバイオ兵器を受け取るつもりはなかった。

「絶対にだとか」

「やれやれ、相変わらず腑抜けじゃな」

「当たり前ですよ。あんなとんでもない兵器誰も受け取りませんよ」

「左様か」

「ですから研究を中止してその内容を全て破棄しろと」

「けしからん」

それを聞いた博士の言葉である。

「そんなことはせん」

「ではどうされるのですか？」

「この西瓜達を日本中にばらまく」

そうするというのである。

「偉大な研究を破棄する位ならそうしれやるわ」

「ヤケクソですか？」

「違うな、嫌がらせじゃ」

さらにタチが悪かった。伊達にマッドサイエンティストではない。

「私の偉大な研究を中止せよと戯言を言う防衛省に対してのな」

「この場合は防衛省が正しいとは思いませんか？」

「思わん」

きっぱりと答える博士だった。

「全くな」

「全くですか」

「何故なら」

そしてここでこう言うのである。

「私がこの世の法律だからだ」

「日本国憲法は無視するんですか？」

「そんなものは何の役にも立たん。平和憲法は幻想に過ぎん」

極めて強引に政治論まで展開する。

「だからじゃ」

「あの西瓜達を日本中にですか」

「拡げる。ではな」

こうしてその西瓜兵器を日本中にばら撒く。日本は忽ちのうちに大混乱に陥った。

特にである。防衛省は西瓜達に包囲されてである。その総攻撃を受けていた。彼等にとってみればたまった話であった。

「何でいつもこうなるんだ」

「あの博士が絡むと」

「今度は西瓜からの攻撃か」

「無茶苦茶じゃないか」

こう言って頭を抱える。防衛省の至る場所にへばり付いて侵入を試みる。そうして体当たりで爆発で攻撃を仕掛け迎撃に出て来たスタッフ達を種攻撃で退ける。

そしてその西瓜達の中にである。博士もいた。

博士は西瓜達を攻撃に向かわせながら白衣を風にたなびかせて言うのであった。

「これが私の怒りだ」

「かなり理不尽な怒りですね」

「何度も言うが私が法律だ」

こう横にいる健次に対して返す。

「その私を怒らせたから当然の報いだ」

「それでこの兵器をどうするんですか？」

「私の思いのままの使用法を認めさせる」

そうするというのである。

「若しまだおかしなことを言えばさらに攻めさせる」

「つまりこれは脅迫ですね」

「誰も私に逆らうことは許さん」

何処までも理不尽な博士である。

「さて、では認めさせるか」

こうしてこの恐るべき西瓜兵器は自衛隊に採用された。畑に忍び込んだ敵を襲う地雷として採用されたのである。防衛省にとっては頭の痛い話であった。

しかし話は終わりではなかった。博士はさらにであった。

「さて、今度はこれじゃ」

「パイナップルですか」

「名付けてパイナップル爆弾」

手足と目に口があるパイナップル達が博士の足元で飛んだり跳ねたりしている。

「これを採用させる」

「させるんですね」

「これは自ら近付いて爆発する爆弾じゃ」
それだというのである。

「さて、今度も凄いな」

「何か勝手に開発し続けてますよね」

「天才はその気の赴くままに開発する」

身勝手ということである。

「だからいいのじゃ」

「また防衛省の人達が泣きますけれど」

「何、私の偉大な頭脳を認めん天罰じゃ」

博士にとってはそういうことになる話である。

「当然の報いじゃ。認めないのなら認めさせるまでだ」

「そうなんですな、本当に」

もう健次に言うべき言葉はなかった。博士はそのパイナップル達

を見て不気味に笑っている。騒動は終わらないのであった。

西瓜 完

2010・1・23

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1695/>

西瓜

2010年10月8日15時22分発行